

2026年度
第2号

医学教育センターニュース



編集・発行 愛知医科大学医学教育センター ～Sep. 2026～

◆医学教育センター各部門からのご報告

基礎科学・初年次教育部門

生成AIの急速な発展により、医学教育を取り巻く環境は大きく変化しています。学生が作成する文章も、一見すると以前より整ったものになってきました。しかしその一方で、文章がどこか画一的になり、自分なりに考えたことが十分に表れていないと感じることもあります。生成AIが容易に「答えらしいもの」を提示してくれる時代だからこそ、自ら問いを立て、時間をかけて考え、試行錯誤しながら自分なりの考えを形にすることの重要性は、むしろ増しているように感じます。

本学では2017年度より、1、2年生で開講してきた教養系選択科目を「リベラルアーツ」として1年生の後学期に開講するようになりました。専門教育で学ぶべき内容が増加するなか、リベラルアーツ科目は5科目の中から2科目を選択する2単位の科目として再出発しました。限られた時間数ではありますが、専門知識を身につける前の段階で人文・社会科学などのさまざまな視点に触れ、じっくり考える時間には、独自の意味があるものと思われます。

今年度からは、前学期・後学期それぞれ1単位の科目として開講時期を変更することになりました。前学期の科目にはいままでよりも科目の範囲を広げ、次の科目を設置しました：「学習科学」（医学教育センター・山口准教授）「英米文学」（外国語・小川助教）「宇宙論」（物理学・山下准教授）「数学」（橋本）の4科目です。それぞれの先生が専門とする分野に触れられることや、グループワークを通じて学生同士が意見を交わしながら学べることは、学生たちにとって貴重な学びの機会になっていると思います。

来年度以降も、よりバラエティーに富んだ教養教育ができるよう、リベラルアーツ科目や第二外国語科目の再編成を計画しています。生成AIの時代だからこそ必要とされる自ら考え続ける力を育てる場として、教養・基礎教育の内容をより充実させていきたいと思っています。

臨床前教育部門 基礎科学・初年次教育部門グループ長
教授 橋本 貴宏



◆第3回 FD講演会

2026年度第3回FDは、7月14日に、ハラスメントをテーマに、鈴木孝太先生（衛生学）を講師として開催しました（対面、Webを併せて90名の参加者）。ハラスメントは誰もが加害者にも被害者にもなり得ると冒頭にお話しがありました。アカハラ、パワハラ、セクハラなど様々なタイプのハラスメントについて、起こりうる状況が紹介されました。

引き続いて、指導講座制度について情報共有を行いました。解剖学講座と産婦人科講座の取り組みを梅本先生・藤本先生にお話し頂きました。学生に感心を持ち、コミュニケーションを取っていることがよく分かりました。本学の指導講座制度は、臨床系講座にとって、卒業まで学生を継続的に担当できる機会です。積極的に活用することにより、将来のリクルート活動にも良い影響を与えるのではないかと思います。

医学教育センター長 早稲田 勝久



産婦人科学講座の取り組み

婦人科の指導講座を含めた学生教育を担当しております、藤本裕基と申します。2025年度より学生教育担当に就任して以降、指導講座として産婦人科を選択してくれた学生の皆さんが、より高いモチベーションを持って医学生生活に取り組めるよう、さまざまな工夫を重ねてきました。具体的には、臨床実習前の手術見学、試験結果を踏まえた学生面談、指導講座新聞の発行など、試行錯誤しながら、さまざまな取り組みを行っています。最近では、成績が振るわない学生さんを早期に把握することができ、医学教育センターとも連携しながら対応することができました。このように、前回のFD講習会では、産婦人科の指導講座としての取り組みの「うまくいった点」を中心に発表させていただきましたが、今回は少し視点を変えて、実際に取り組んでみて「うまくいかなかった点」についても紹介したいと思います。

例えば、手術見学については、学生さんから申し込みがあっても、手術の都合などにより、急遽見学中止せざるを得ないこともたびたびありました。また、帝王切開については毎回のように希望者がありますが、それ以外の手術については、なかなか希望者が集まらないという状況もあります。そのほか、Microsoft Formsを利用した学生さんからの相談窓口も設けていますが、現時点ではまだ一件も相談はありません。このように、学生さんのために「こういうことをやってみたい」と思うことはいろいろありますが、実際に始めてみると、必ずしもこちらが期待したようには進まないことも多く、すべてがうまくいっているわけではありません。

それでも、こうした取り組みを少しずつ続けてきたことで、産婦人科を志望している学生さんの間にも、徐々に当科の取り組みや雰囲気少しずつ浸透してきたように感じています。今後も、学生さんの反応を見ながら、うまくいかなかった取り組みについては見直しつつ、無理なく継続できる形で、産婦人科を身近に感じてもらえるような取り組みを続けていきたいと思っています。

産婦人科学講座 藤本 裕基

解剖学講座の取り組み

解剖学講座では、2～6年生を対象に、「交流・学習・研究」の三つを柱として指導講座制度を運営しています。年2回の交流会では、軽食を囲みながら教員と学生、上級生と下級生が学年を越えて自由に話せる場を設けています。以前は教員が中心となって進行していましたが、「上級生から試験や実習の話を聞きたい」「他学年と交流したい」という学生の声を受け、現在は軽食の準備にも学生が加わるなど、学生主体の会へと見直しました。



学習面では、医学部生に加え、看護学部生、NP（診療看護師）学生、理学療法士・作業療法士などが参加する解剖セミナーへの参加機会を提供しています。実際の人体構造を観察し、教科書の知識を三次元的・臨牀的な理解へつなげるとともに、多職種の視点を学ぶ機会となっています。また、解剖学研究に関心をもつ学生には、研究テーマの設定から実験・解析、学会発表まで継続して支援しています。その成果は、愛橋医学奨励賞や学会でのUndergraduate Poster Awardの受賞にもつながりました。今後も学生の意見を丁寧に取り入れ、指導講座が学年や立場を越えて学び合い、一人ひとりの成長につながる場となるよう工夫を重ねてまいります。

解剖学講座 梅本 佳納 榮

◆臨床実習前・後OSCE

今年も無事、OSCEが終了しました。7月11日に6年生を対象（113名）とした臨床実習後OSCEが実施されました。この試験は、医学生が診療参加型臨床実習において十分な臨床能力を修得できているかを評価する試験です。本学は、共用試験実施評価機構の課題（機構課題）3題と各大学独自の課題3題を実施しました。今回の臨床実習後OSCEにおける学生のパフォーマンスを通して、臨床実習の在り方を各科で再検討し、今後の臨床実習の充実に活かして頂ければと思います。

8月29日、30日に4年生を対象として臨床実習前OSCEが実施されました。今年度は、対象学生が125名と多かったため、半日で実施していた方法から午前・午後の2部制に変更しました。また1日目に機構派遣監督者から実施方法の改善指摘があったため、2日目は実施課題を減らして、9課題（1日目：全身状態とバイタルサイン、頭頸部、神経、四肢と脊柱、救急、基本的臨床手技、2日目：医療面接、胸部、腹部）を実施しました。2023年度の公的化から4年目となりましたが、実施体制の試行錯誤は続いています。今年度から評価者の募集に関して変更しました。これまで資格保有者の手上げでしたが、一部教員への負担が増えており、また必要人数の確保が難しくなり、臨床系全講座に対して医局員数に応じた協力者数の割当を行いました。評価者を担当するためには、資格が必要となるため、各講座で継続的に資格保有者を増やしていく必要があります。

OSCE試験前の1週間、4年生にはシミュレーションセンターを開放して、自己練習する時間を確保しました。例年に比べて多くの学生が、CBT翌日から週末も含めて熱心に練習していたのが印象的でした。その甲斐もあり、多くの学生が本試験で合格すること出来ました。今回修得した診察技能を10月から始まる臨床実習で活用して欲しいと思います。

今年度の臨床実習後OSCEには、評価者69名、模擬患者58名、運営スタッフ32名、臨床実習前OSCEには、評価者95名、模擬患者80名、運営スタッフ32名に協力頂きました。多くのスタッフのご協力に感謝します。

医学教育センター長 早稲田 勝久

◆多職種連携演習（IPE） 2

本学の多職種連携演習は、1～4年生の各学年1回ずつ、看護学部、名城大学薬学部、名古屋学芸大学管理栄養学部の4学部で実施しています。9月18日、2年生を対象とした多職種連携演習を、医学部126名、看護学部104名、薬学部12名の計242名で実施しました。2年生では、チームとしての活動をテーマとして、脱出ゲームを行いました。脱出ゲームを行うにあたり、浅田先生（自治医科大学）と村岡先生（藤田医科大学）に毎年多大なるご協力を頂いています。多くの学生がはじめてチームとなった状態でしたが、脱出ゲーム開始後は、積極的にコミュニケーションをとり、自身のもつ情報を共有しながら、前のめりにグループで話し合いをしているのが印象的でした。こういったチーム力を、日常の学生生活や将来の医療チームに活かして欲しいと思いました。



医学教育センター長 早稲田 勝久

◆多職種連携演習（IPE） 3

6月18日、3年生を対象とした多職種連携演習を実施しました。今回のIPE3では、本学看護学部、名城大学薬学部、名古屋学芸大学管理栄養学部との合同で演習を行い、医学部生108名、看護学部生128名、薬学部生13名、管理栄養学部生24名の計273名が参加しました。



これまでのIPE1・2では、多職種がそれぞれ異なる専門性を持つことを理解するとともに、患者さんのより良い支援のためには職種間の連携・協働が重要であることを学んできました。今回のIPE3では、「患者・家族の視点に立ち、それぞれの職種の立場からチームとして課題解決に取り組むことができる」ことを学修目標に掲げ、模擬事例を題材として演習を行いました。学生たちは、患者さんが抱える健康上の問題だけでなく、心理的・社会的な問題にも目を向け、それらが相互にどのように影響しているのかを考えながら、課題の抽出と解決に向けたチーム介入プランについてグループで議論しました。

議論の中では、医学部生からは主に医学的評価や治療方針に関する意見、看護学部生からは患者さんの療養生活支援、心理的ケアに関する意見、薬学部生からは薬物療法の適正化や服薬状況確認・指導に関する意見が、そして管理栄養学部生からは、栄養状態評価や食事療法に関する意見がそれぞれ示されました。このように、各職種が異なる視点から患者さんを捉え、その専門性を生かして意見を出し合うことで、単一職種だけでは見落としやすい課題にも目を向けることができました。さらに、互いの専門知識や考え方を尊重しながら対話を重ねることで、治療だけではなく生活・心理・社会的背景を含めた包括的な支援プランが各グループから提案されました。学生にとっては、専門領域から患者さんを捉えるだけでなく、他職種の視点を取り入れることで、患者さんを多面的に理解する機会となりました。

演習後レポートでは、多職種間のコミュニケーションスキルの重要性に加え、相手の意見を理解しようとする姿勢や、チームで課題を解決しようとする前向きな意識の重要性を挙げる学生が多くみられました。IPE3での学びを通して、専門知識や技能だけでなく、異なる専門性を持つ者同士が協働するための姿勢やコミュニケーションの重要性についても理解が深まったものと考えます。今回の演習で得た経験が、今後のIPE4や臨床実習での学びへと発展し、将来の良好な多職種協働に結実することを期待しています。

シミュレーションセンター 准教授 森下 啓明

◆学修支援勉強会（2026年度 後期）

2026年度後期学修支援勉強会が9月7日より始まりました。開始に先立ち、9月2日に対象学生を集めてガイダンスを行い、学修支援勉強会の目的と進め方について説明しました。学修支援勉強会は、参加学生の意見を取り入れながら、より学びやすい環境となるよう随時ブラッシュアップしています。

今回私は、2022年に3年生で学修支援に参加し、今年春に愛知医科大学を卒業した6年生4名に、当時の気持ちについて個別インタビューを行いました。4名全員が「自分の成績の位置を客観的に把握できたことが良かった」と話してくれました。また、「当時は面倒に感じることもあったが、学修支援をさぼるのは危険であり、ネガティブに捉えず自分なりの意義を見つけることが大切だと後輩に伝えてほしい」と語った学生もいました。振り返れば、2022年当時、彼らはほとんど欠席することなく毎回参加していました。全員が常に勉強していたわけではありませんが、試験勉強の情報交換をしたり、担当教科の先生と談笑したりする姿も見られました。また、インタビューでは「CBT予想問題を解くのは難しすぎた」という声もあったため、今年度は3年生であることを踏まえ、できるだけ臨床の先生方に解説していただきながら一緒に問題を解くスタイルで進める予定です。もちろん、全員が愛知医大の学修支援にフィットするわけではありません。しかし、参加学生の意見をできる限り取り入れ、参加しやすく、意義のある場となるよう、私たち教員はサポートしていきます。そのうえで、学生自身が「月曜日6限目の70分間を有意義に過ごしたい」という気持ちを持つことが何より大切だと考えています。毎回快くご協力くださる基礎科学・基礎医学・臨床医学の先生方に、心より感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

医学教育センター 准教授 河合 聖子

	1年生	2年生	3年生
9月7日	解剖学1b	ウイルス学	消化管
9月14日	生理学1	病理学	消化管
9月28日	解剖学1b	薬理学	肝胆膵
10月5日	生理学1	細菌学	内分泌／糖尿病
10月19日	解剖学1b	ウイルス学	産科
10月26日	生理学1	薬理学	
11月2日	解剖学1b	病理学	婦人科
11月9日	生化学1	細菌学	小児科
11月16日	生化学1	病理学	小児科
11月30日	解剖学1b	薬理学	
12月7日	生理学1		



◆選択講座（後期）

2026年度前期の選択講座（21講座）が終了しました。9月からは、後期の選択講座（28講座）が開講されています。今回は、昨年度から開講した「主体的な学びを活かす」について、学生による学会発表をご報告いたします。

講座等	担当者	テーマ
肝胆脾内科	荒井 潤	英語学習で広がる世界観
衛生学講座	鈴木 孝太	伝わる健康情報をつくる：ヘルスリテラシーと実践的コミュニケーション演習
災害医療研究センター	津田 雅庸	災害医療の実践
生理学講座	山村 彩	性差医療と性差研究について
感染・免疫学講座	伴野 勸	予防医療のためのバイオマーカー探索～体のサビを質量分析計を使って調べてみよう～
衛生学講座	鈴木 孝太	働く人の健康を考える：産業医の役割と実践演習
循環器内科	内藤 千裕	医学生のための心電図攻略講座
病理学講座	中村 律子	能動的病理学実習
解剖学講座	梅本 佳納榮	解剖学講座の基礎研究についてご紹介
医学教育センター	山口 奈緒子	主体的な学びを活かす（実践編）
生化学講座、免疫学講座、病理学講座	伊藤 秀明	みんなで話そう 生化学・免疫・病理
医学教育センター	河合 聖子	実践例から学ぶ医学部初年次学習法
物理学	山下 敏史	機械学習入門
衛生学講座	鈴木 孝太	生成AI応用
臨床研究支援センター	大橋 渉	医療法人開業のためのマーケティング講座 -立地、商圏、集客？…経営に失敗しないための基礎知識-
数理科学	橋本 貴宏	金融リテラシー入門
臨床研究支援センター	大橋 渉	怪しい数字をぶった切る -数字に騙されないために-
小児科	伊藤 嘉規	専門医が語る小児科医の仕事
病理学講座	中村 律子	受動的病理学実習
心理学	宮本 淳	ワークで学ぶコミュニケーション・カウンセリング
臨床研究支援センター	大橋 渉	文字情報をぶった切る -テキストマイニングの世界-
化学	有信 哲哉	質量分析計を用いた生体分子・医薬品の測定と反応有機化学
数理科学	橋本 貴宏	統計学の基礎固め
地域総合診療医学寄附講座	上松 東宏	触って学ぶ！医学生のためのエコー入門
IR室	佐藤 麻紀	英語で病態生理学を学ぼう
消化器外科	深見 保之	消化器外科
総合診療医学講座	山本 さゆり	ストレス関連疾患「心身症」とはなにか？
緩和ケアセンター	森 直治	臨床栄養の基礎

「主体的な学びを活かす（立案編／実践編）」

2025度から、学生発案の選択講座「主体的な学びを活かす」を開講しています。2024年度の「基礎医学セミナー」（2年生対象）で配属学生と話をすることで、教員側の教育的意図がいまひとつ伝わっていないことや、学生のニーズとのすれ違いに改めて気付かされたことが出発点です。この学生らとともに、学びについて考え、授業を立案し、実践する講座を立ち上げました。

最初の立ち上げから中心となり講座を企画・運営してきた4年生の4名は、初めての試みに試行錯誤しながらも、楽しみながら頑張ってきました。そして、8月の日本医学教育学会にて成果を発表しました。自身らでしっかり考え実践してきた彼らは、初めての学会発表でも積極的に意見を交わすことができ、とても頼もしい姿を見せてくれました。ありがとう。



医学教育センター 准教授 山口 奈緒子

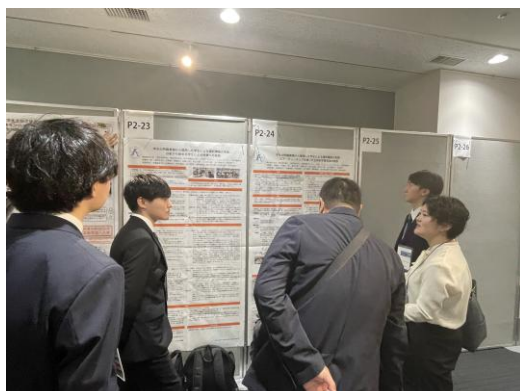
「主体的な学びを活かす（実践編／立案編）」を運営して

私たちは、2026年7月31日から8月2日に開催された第58回日本医学教育学会学術大会に参加し、ポスターセッションで2題の演題を発表しました。

【発表演題】

- ・ 学生の問題意識から展開した学生による選択講座の実践：白紙から始める学生による授業への挑戦
- ・ 学生の問題意識から展開した学生による選択講座の実践：ピア・ティーチングを通じた主体的学習促進の検討

今回の研究では、選択講座の枠組みを活用し、学生が主体的に学習するためにはどのような取り組みができるのかを検討しました。講座の運営は一部のコアメンバーが中心となっており、2025年度前期には参加した学生とともに「主体的な学習とは何か」について議論しました。同後期には、前期の議論を踏まえて、主体的な学習を実践する方法として学生同士が教え合う「ピア・ティーチング」を実施しました。学会では、こうした講座の企画・運営と、ピア・ティーチングを通じた学生の主体的な学習の促進について、それぞれ1題ずつ、計2題を発表しました。また、他大学の学生や先生方と交流する中で、さまざまな取り組みや考え方に触れ、多くの刺激を受けることができました。実際に講座を運営する中で、予定通りに進行することの難しさや、参加者それぞれに異なる興味や学習目的を背景に全員にとって有意義な講座を作り上げることの難しさを実感しました。一方で、講座を通して主体的な学びについて考え直すことで、その意義を改めて考える機会となりました。今回の経験を通して得た学びを、今後の学習や学生同士の活動にも生かしていきたいと思います。また、来年度以降は後輩たちがこの取り組みを受け継ぎ、新たな講座を開講する予定です。参加者全員を満足させることは容易ではありませんが、今回の経験を生かしながら、多くの学生が「参加してよかった」と思えるような講座につながっていければと思います。



医学部 4年生 伊藤 佑一郎

今回、学生のうちに学会発表を経験できたことは、とても貴重な機会だったと感じています。また、自分たちで実際に授業を企画・運営したことで、これまで学生として授業を受けるだけでは気づけなかった、授業をつくる先生方の大変さや、限られた時間の中で内容を組み立てる難しさを知ることができました。学生としての立場だけでなく、教える側の立場を経験できたことで、今後の実習などでの学びに対する姿勢や学習方法にも生かしていけると思います。講座が終わるたびに運営メンバーで振り返りを行い、「次はどうすればもっと良くなるか」を話し合いながら少しずつ改善していったことも、印象に残っています。また、一つの講座運営について異なる視点から二つのテーマに分け、それぞれ別の演題として発表できたことも、とても面白い経験でした。学会当日は程よい緊張感の中で発表することができ、質疑応答にもしっかりと臨むことができました。自大学の先生方だけでなく、他大学の多くの方にも興味を持っていただき、さまざまな質問や意見をいただけたことが嬉しかったです。このような活動や学会発表の機会をいただけたのは、講座の企画から発表までサポートしてくださった先生方のおかげです。本当にありがとうございました。来年度以降も後輩がこの講座を引き継ぎ、さらに新たな講座も開講する予定なので、今後どのように発展していくのか楽しみにしています。

医学部 4年生 北野 媛

発表した演題の内容は去年の当時3年生の前期から4年生の前期にかけて行った選択講座の内容でした。その選択講座では学生の運営を主体として「主体的な学びとは何か」というテーマを軸に学生間でどんな授業形式や教え方による学びが主体性を引き出せるかについて議論、実践を行いました。テーマが自身の経験と結び付けやすいこともあり、様々な視点の意見を交わすことができた一方、実践してみるとそう簡単には上手くいかないという場面もありました。また選択講座を自分たちで企画、運営をするということ自体も初めての経験だったため、その場その場での試行錯誤や意見交換を行いました。受講する学生としてこの議題を考えるだけでなく、企画・運営をする側に回っていたため、まさに「主体的な学び」について考えさせられる機会が多くあり、その難しさを実感しました。学会ではこの選択講座のポスターについて質疑応答の形で他大学の様々な方とお話ができたり、新たな視点からの意見を貰うことができたりと非常に貴重な経験をすることが出来ました。学会で発表するにあたっては、自分たちがやってきたことをポスターに簡潔に分かりやすくまとめる難しさや、講座を全く知らない状態の方に一から説明する難しさもありました。学会当日には他の方のポスターのユニークな作り方や工夫、説明でいい刺激をいただいた気がします。山口奈緒子先生、河合聖子先生、早稻田勝久先生には常に選択講座の企画・運営をサポートして頂きました。選択講座、学会のポスターセッション参加の機会も先生方のおかげです。このような貴重な機会をいただけたことに感謝申し上げます。今後もこの講座は開講する予定ですので、興味を持った学生の方はぜひ参加してみてください。

医学部 4年生 関 颯太

選択講座を受け身でしか参加してこなかった中、この1年間「主体的な学びとは何か」という内容に関する選択講座をつくりあげていく運営側を経験させて頂き、学生をまとめつつ進行を行うことは想像以上に難しく感じました。講座を運営して気づいたことは、参加する側と進行する側が一体となって協力しないと、進行する側は思い通りに進行できず、参加する側も講座に参加する意欲が無くなってしまうということが分かりました。しかし、この経験を通して自らが先生の立場になることで、医学生に対してどうしたら主体的に講座に参加してくれるのかを考えるきっかけにもなり、講座を運営する側の意見だけでは講座が上手くいくことはなく、参加する学生側の立場にもなって運営を考えることはとても重要だと思いました。また、学会ではこの選択講座の立ち上げから実際に講座を開いてみて感じたことを発表しました。学会では多くの医学に携わる方々がいる中で、多くの方が我々の発表に耳を傾けて親切に聞いてくださり、多くの議論やコミュニケーションを行うことができ、沢山の知識や意見を学ぶことのできた良い学習の場でした。

医学部 4年生 柳沢 宇亮



◆インターンシップの受け入れ

今年も、名古屋高等学校の高校2年生4名（7月15日～17日）、南山高等学校女子部の高校1年生5名（7月22日～24日）を、インターンシップ生としてお迎えしました。例年同様、多くの先生方にご協力いただき、医療現場を肌で感じられる充実したプログラムとなりました。

期間中は、呼吸器外科・消化器外科の手術見学、シミュレーションセンターでの採血・CPR・縫合の体験、上部消化管内視鏡の見学、ER・ドクターヘリの見学、加齢医科学研究所の見学、放射線科・薬剤部・中央検査室の見学、さらにOB/OGの学生や研修医との交流など、盛りだくさんの内容を体験してもらいました。

シミュレーションセンターでの体験では、高校生が自ら針と糸を手に取り、真剣な表情で実習を行っていました。初めは緊張で器具の持ち方にも戸惑いが見られましたが、回数を重ねるうちに手つきが慣れ、楽しい、という声が多く聞かれました。

最終日のアンケートでは、参加者9名全員から高い評価をいただき、「思っていたよりもずっと近くで見学でき、勉強のモチベーションになった」「先生方がとても親切で、貴重な経験になった」「将来の仕事について迷っていたが、医師になるために頑張ろうと思えた」といった声が多く寄せられました。手術やドクターヘリの現場を間近にした体験、そしてスタッフとの温かい交流が、生徒さんたちの心に深く残ったようです。

医療職に興味を持つ高校生にとって、実際の病院での体験は大変貴重な機会かと思います。これほど充実したプログラムが実現できたのは、受け入れをご担当くださった先生方のお力添えあつてのことです。お忙しい診療の合間を縫って、丁寧に生徒さんたちと向き合ってくださいましたこと、心より感謝申し上げます。

高校生が目を輝かせながら学ぶ姿は、私たちにとっても大きな励みになりました。これからも、こうした出会いを大切にしつつ、次世代の医療を担う若い力を育てていけたら嬉しく思います。

循環器内科 医員助教 松尾 幸果



◆医学教育学会に参加して

第58回日本医学教育学会が富山（2026年7月31日～8月2日）にて開催されました。今年度のテーマは、「Beyond your boundaries and expectations」（「既存の枠を越え、想像を超える学びへ」）であり、生成AI関連をはじめとして多くのセッションが企画されていました。プログラムから抜粋した主要なテーマは、生成AIと医学教育、学習者評価、地域医療教育、多様性と学習者支援、教育方法と学習理論、多職種連携などがありました。本学からもワークショップや演題などで数多くの発表があり、学生も活発に議論しているのが印象的でした。

<シンポジウム>

- ・上級医師国家試験と接続した臨床実習における観察評価 (Workplace-Based-Assessment) : ある程度の標準化と総括評価の導入 (伴)

<ワークショップ>

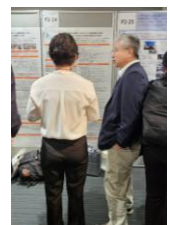
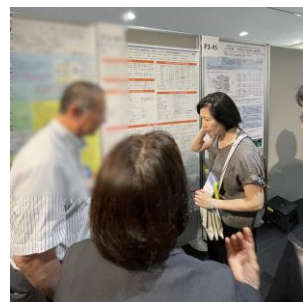
- ・医師臨床研修での生成AIの活用 (早稲田)
- ・動画・音声付臨床問題を作る・増やすー生成AI時代の医師国家試験CBTを見据えて (早稲田)
- ・第8回医療系IR友の会ミーティング～プログラム評価における実践結果の共有によりIRの充実を図る (IR室・佐藤)
- ・バウンダリーレス・キャリア (境界のないキャリア) 時代の道標 (衛生学・柿崎)

<一般演題>

- ・医学生のバーンアウト予防と性格的特性に基づく個別的支援を目指して (早稲田)
- ・3学年次に成績不振で学修支援勉強会に参加した学生の医師国家試験後のインタビュー調査 (河合)
- ・臨床実習前OSCEの成績と事前練習についての検討 (シミュレーションセンター・森下)
- ・医学部の新入生向けアカデミックスキル導入科目「ICTリテラシー」の教育実践 (数理科学・橋本)
- ・医学生における生成AIとの相談的関わりの実態ーフォーカス・グループ・インタビューからー (心理学・宮本、外国語・平田)
- ・産婦人科クリニカルクラークシップにおける多面的教育プログラムの実践と教育効果の検討 (産婦人科・藤本)

<学生発表>

- ・学生の問題意識から展開した学生による選択講座の実践：白紙から始める学生による授業への挑戦 (伊藤佑一郎、柳沢宇亮、北野媛、関颯太、田摩大空、中山古都、井口大二朗他)
- ・学生の問題意識から展開した学生による選択講座の実践：ピア・ティーチングを通じた主体的学習促進の検討 (北野媛、関颯太、伊藤佑一郎、柳沢宇亮、田摩大空、中山古都、井口大二朗他)
- ・医学生と教員の本音から考える講義資料のあり方と協働ワークショップの活動報告 (早稲田彩乃他)



毎年参加者数が増加しており、今年度の富山大会では1900名以上の参加者でした。今年は教務部長の鈴木耕次郎先生もご参加いただきました。大会を通して、他大学の医学教育・医療者教育関連の参加者とともにさまざまなトピックにおいてディスカッションでき、有意義な大会でした。来年は熊本（2027年7月30日～8月1日、熊本大学担当）で開催予定です。また、APMEC（アジア・パシフィック医学教育学会：2027年1月13～16日、京都）も開催予定です。

IR室 講師 佐藤 麻紀

◆学生の活動報告

2026年7月31日から8月2日に開催された第58回日本医学教育学会学術大会において、学生ワーキンググループ（以下、学生WG）のメンバーとして活動しました。約2年前、学外の海外留学プログラムに参加した際のご縁で、昨年度の秋田大会へお誘いいただいたのをきっかけに、本学生WGでの活動を始めました。今年度は、2つのテーマと2つの有志企画の計4チームに分かれて、それぞれ発表いたしました。

私自身は、「学生が使いたくなるレジュメと講義動画とは」というテーマで、計9大学12人の学生とともに、この1年活動して参りました。先輩が作成した試験対策資料だけでなく、昨今は予備校の資料をメインに学習する学生が大半を占め、大学教員から配布されるレジュメの使用方法是多様化しています。教員が臨床上の重要点や教育的意図を込めてレジュメを作成してくださる一方、医学生は試験対策やその効率性を重視する傾向にあり、両者のレジュメに対する認識のズレに注目しました。

そこで、複数の大学の先生方にご協力いただき、学生と教員を交えたワークショップを開催しました。そこでは、「まずは全体像をつかみたい」「CBTや国試対策をしたい」という学生側のニーズと、「臨床の醍醐味を伝えたい」「学修の道しるべとして利用して欲しい」という先生方の想いのギャップを言語化することができました。また、事前に行ったアンケートでは、「覚えるべき情報の優先順位を明確にして欲しい」「スライド枚数の多い物は講義が一方向的になりがち」といった率直な学生の意見も多く寄せられました。このようにして、一方向的になりがちな講義設計を双方向的な改善へと導き、実際の資料作成や講義設計における小さな工夫として、このような対話が実現したことを非常に有意義に感じております。

さらに今回の富山大会より、学生特別委員会が発足し、医学教育に関心をもつ学生同士が交流し、よりアカデミックに活動する機会も増えることが期待されています。今後は勉強会や研究活動、学生と研修医間の交流等も予定されております。加えて私自身も高学年となり、10月からはクリニカルクラークシップが開始されるため、実習生としての視点でも医学教育に関わっていきたいと思います。これからは、自分自身が医学教育についての知見を深めていくことはもちろん、後輩を育て、活動がより持続可能なものとなるよう、組織に貢献していきたいと考えております。

最後に、今大会の運営や学生WGの活動にご協力いただいた全ての方々に心より御礼申し上げます。

医学部 4年生 早稲田 彩乃

